

寺 下 遺 跡

1998

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

寺之下遺跡



1998

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

- 1 本書は、1997（平成9）年度に発掘調査を実施した農村活性化住環境整備事業（筒原地区）に係る寺之下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、広島県可部農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、中村尚、中山洋明、植田千佳徳が担当した。
- 4 整理作業及び遺物実測・遺物写真撮影は中村が行った。
- 5 本書は、中村が執筆・編集した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。

S B：掘立柱建物跡

S D：溝

S K：土壤

S X：性格不明の遺構

- 7 出土遺物実測図の断面は、須恵器：黒ヌリ、その他：白ヌキである。
- 8 挿図と図版の遺物番号は同一である。
- 9 本書で使用している方位はすべて国土座標第Ⅲ系による。
- 10 第1図は建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（安芸吉田）を使用した。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	6
IV	遺構と遺物	7
V	まとめ	16

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)	3
第2図	周辺地形図 (1 : 1,000)	5
第3図	遺構配置図 (1 : 300)	折り込み
第4図	S B 1 実測図 (1 : 60)	8
第5図	S B 2, S D 1 実測図 (1 : 60)	折り込み
第6図	S K 1 実測図 (1 : 30)	9
第7図	S K 2 ~ 4 実測図 (1 : 30)	11
第8図	S X 1 ~ 3 実測図 (1 : 30)	13
第9図	出土遺物実測図 (1 : 3, 19は1 : 2)	15

図版目次

図版 1 a	遠景 (北東から)	図版 5 a	S K 1 (南から)
b	調査前近景 (東から)	b	S K 2 (東から)
c	調査後全景 (東から)	c	S K 3 (南から)
図版 2 a	調査後全景 (西から)	図版 6 a	S K 4 (南から)
b	調査区東部 (南西から)	b	S D 1 (北西から)
c	調査区西部 (南東から)	c	S X 1 (南から)
図版 3 a	S B 1 (南から)	図版 7 a	S X 2 (東から)
b	S B 1 (東から)	b	S X 3 (南東から)
c	作業風景	c	22-T区柱穴遺物出土状況 (南から)
図版 4 a	S B 2 (南から)	図版 8	出土遺物
b	S B 2 (西から)		
c	S B 2 P 8 柱痕 (南から)		

I はじめに

寺之下遺跡の調査は、農村活性化住環境整備事業（向原地区）に係るものである。向原町では「明るい活力あるまちづくり」の実現を図るために、農業基盤の整備を推進するとともに、住環境の整備も併せて行っている。本事業はその一環として実施され、上下水道・公園などの生活環境の整備を行うとともに、自然環境の保全につとめ、豊かな人間性をはぐくむまちづくりをめざすものである。

向原町は、1994（平成6）年10月、向原町教育委員会（以下「町教委」という。）に対し、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて協議した。1995年、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は要試掘調査地点が20か所ある旨を回答したが、当該事業地が県営ほ場整備事業（向原地区）の事業地と一部重複しており、要試掘調査地点についても重複することとなつた。

1996年、町教委は県教委の協力のもとに、当該事業に係る要試掘調査地点No.1～7（県営ほ場整備事業に係る要試掘調査地点No.4）の調査を行い、尾原遺跡4,200m²と寺之下遺跡10,500m²を確認した。

この結果を受けて、県教委・町教委は可部農林と寺之下遺跡の取扱いについて協議を重ね、設計変更等による遺跡の現状保存が困難である3,800m²を1996～1998年度にかけて町教委が調査を行い、その北側の1,110m²を1997年度に財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が調査を行うこととした。そして、1997年2月、可部農林は県教委に対し、センターへの発掘調査を依頼した。

発掘調査は1997年5月19日から8月1日まで実施した。この間、7月13日には、町教委と共に遺跡見学会を実施し、約100名の参加があった。

本報告書は以上の経過のもとに行った発掘調査の成果を取りまとめたものである。今後の埋蔵文化財の研究資料として、また、この地域の歴史を明らかにしていく一助として寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、広島県可部農林事務所、向原町教育委員会及び地元の多くの方々の御協力をいただいた。また、報告書作成にあたっては奈良国立文化財研究所の山中敏史氏、広島大学工学部の三浦正幸氏から御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

II 位置と環境

寺之下遺跡は高田郡向原町坂に位置する。向原町は広島県のほぼ中央部、高田郡の東南端にあり、北は甲田町、北東は双三郡三和町、南東は賀茂郡豊栄町・福富町、南西は広島市安佐北区、北西は吉田町に接する。面積の八割が標高400~900mの山地で、平畠山（標高478.1m）・高嶺山（標高436.6m）付近を分水嶺とし、三篠川（太田川支流）は町の中央を西流し瀬戸内海に、戸島川（江の川支流）は北部を北流し日本海にそれぞれ注ぐ。向原町は古くは石州街道、現在も南北にJR芸備線、県道広島三次線、東西に吉田町・豊栄町方面へ幹線道路が通る交通の要衝である。

本遺跡は向原町の中央部、三篠川北側の平沖段丘上に位置している。以下、向原町の歴史的環境について本遺跡のある坂地区を中心に概観していきたい。

当町域では縄文時代以前の遺跡は確認されていない。

弥生時代に入るといくつか遺跡が確認されている。1981（昭和56）年に佐山の採石現場で弥生土器が出土した佐山天狗岩遺跡（坂）、琴比良神社裏手の箱式石棺が確認されている国貞山遺跡（坂）、田中遺跡（長田）などがある。

古墳時代には、当町域に約100基の古墳があり、そのうちの約30基は戸島地区にある。前半期の古墳については数基が確認されており、堅穴式石室を主体部とする松尾古墳（長田）などがある。

後半期の古墳は横穴式石室を主体部とする。本遺跡のある坂地区には、三篠川北側に尾原古墳群、千間塚古墳、水野内千間塚古墳など、三篠川南側におんばん古墳群、岩屋地古墳などがある。特に千間塚古墳は環状瓶・鳥形瓶・小壺及び脚付瓶など特異な装飾須恵器が出土した。築造時期は7世紀と考えられている。戸島地区には古墳が多く見られ、滝川古墳群の戸島大塚古墳、一つ町古墳、陰地古墳、三島古墳群などがある。なかでも最大級の戸島大塚古墳は墳丘が一辺18m、高さ5mの方墳で、全長10.7m、最大幅1.85m、高さ2.3mの横穴式石室を主体部とする。石室に切石状の石材を使用するなど7世紀の築造と考えられる。一つ町古墳は全国で唯一の出土例である亀形瓶が見つかっている。また、江の川流域の古墳に散見される玄門立柱をもつ石室をもつのもこの地区的特色である。そのほか長田・有保地区にも古墳が分布している。

古墳時代の集落としては、古墳時代から近世にかけての遺跡である副免遺跡（長田）がある。

古代の向原は律令制下、『和名類聚抄』によれば、高田郡内の豊島郷・風速郷に比定され、本遺跡のある坂地区は風速郷の一部である。風速郷内の正敷田遺跡（長田）から、火炎文（八弁蓮華文）瓦が出土して古代寺院の存在が推定される。この種の瓦は大和の桧隈寺跡、吳原寺跡などの出土瓦と同種で、出土例は県内では本郷町の横見廃寺跡、吉田町の明官地廃寺跡のみで全国的にも数例しかみつかっていない。正敷田遺跡は横見廃寺跡、明官地廃寺跡と同様に飛鳥時代後半から奈良時代初期のもので、大和と関係の深い寺院であったと考えられ、この時期の風速郷にかなりの有力豪族がいたことが推定できる。また、長谷山の中腹で伽藍跡が確認された円明寺跡



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)

1 寺之下遺跡	2 尾原遺跡	3 国貞山遺跡	4 尾原古墳群	5 城山下古墳
6 千間塚古墳	7 久志城跡	8 水野内千間塚古墳	9 負根古墳群	10 地加清1号遺跡
11 負根北古墳	12 陰地古墳	13 噴石山神社古墳	14 三島古墳群	15 高嶽山古墳
16 小丸子古墳群	17 日下津城跡	18 正敷田遺跡	19 田屋城跡	20 刷免遺跡
21 田中遺跡	22 おんばん古墳群	23 岩屋地古墳	24 弥谷古墳群	25 重実古墳
26 清木古墳				

(長田)から布目瓦の破片が出土し、平安時代の山岳密教寺院の存在が考えられる。

『向原町誌』によると、その後、風速郷は高田郡司である凡氏によって支配されてきたが、11世紀後半に藤原頼方・頼成が郡司に補任されて以後、風速郷の所領は藤原成孝から源頼信、中原業長へと譲渡された。この時期に平家一門の繁栄とともに高田郡をはじめ安芸国は平氏の支配下に置かれていたが、1174（承安4）年、業長は所領を厳島神社に寄進して社領化されていった。また、1149（久安5）年に吉田荘は京都祇園社の莊園として寄進されたが、この荘域に豊島郷が含まれていた。平安末期には、風早郷は消滅し、坂地区は豊島郷に取り込まれた。

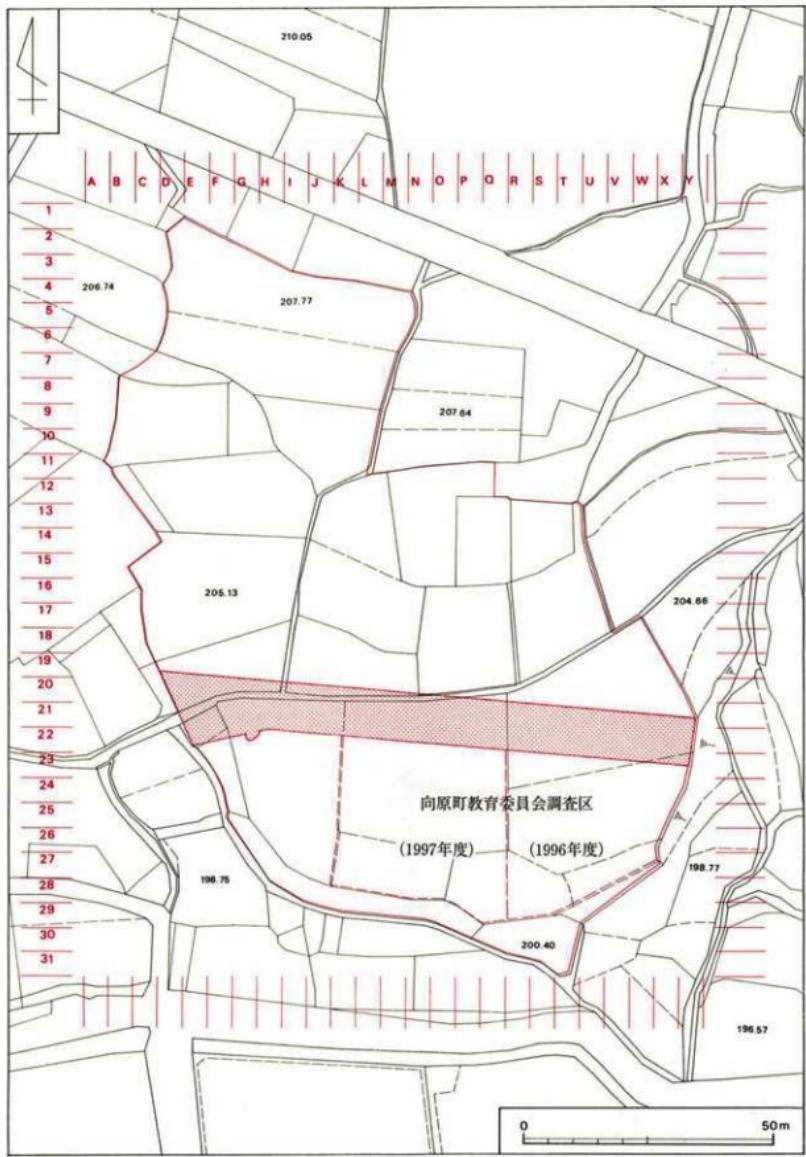
中世になると鎌倉幕府の御家人佐伯為弘が嚴島神社領の長田郷・秦保塙別府（いずれも旧風速郷）の地頭職に補任された。1221（承久3）年の承久の乱で幕府方に付いた佐伯氏は地頭職を安堵されて為重に職を譲り、その後地頭職は代々子孫に引き継がれたが、1301（正安3）年に内藤景廉に譲られた。一方、吉田荘域の豊島郷は1247（宝治元）年の三浦泰村の乱以前から地頭職・毛利氏の支配下にあったことがわかっている。1296（永仁4）年には、領家である花山院家との間で下地中分が行われ、豊島郷は領家方のものとなった。その後、建武新政期に領家方に吉田荘の地頭職が与えられたが、再び毛利元春が実権を奪い、1381（康暦3）年に毛利氏による吉田荘の一円支配が確立した。南北朝時代以降は、中央の紛争が安芸国にも波及して当町域においても紛争が続いたが、次第に毛利氏の勢力が拡大していった。毛利元春の弟の匡時は坂氏の祖となり、代々毛利氏の最有力庶家として坂郷を治めた。また、坂氏の日下津城跡（坂）、久志城跡（坂）、内藤氏の田屋城跡（長田）、有富氏の古吹城跡（有留）などは南北朝から戦国時代にかけての山城跡である。発掘調査が行われた中世以降の遺跡としては、地加清1号遺跡（戸島）、上滝川1号遺跡（戸島）、平木遺跡（戸島）がある。戦国時代には当町域も戦場となつた。1540（天文9）年の郡山城合戦では坂・豊島で毛利軍と尼子軍が戦火を交えている。また、円明寺跡（長田）は1566（永祿9）年に月山富田城で降伏した尼子義久兄弟が幽閉された地である。

註

- (1) 小都隆「千間塚古墳」「探訪・広島の古墳」 芸術友の会 1991年
- (2) 小都隆「戸島大塚古墳」「探訪・広島の古墳」 芸術友の会 1991年
- (3) 小都隆「広島県高田郡向原町古墳出土の亀形瓶」「考古學雑誌」第76巻第3号 日本考古學會 1990年
- (4) 向原町教育委員会「副免遺跡」 1996年
- (5) 1065年の伴利重田地売券写（野坂文書）には、風早郷と表記され、解体されるまで続いた。
- (6) 小都隆・松井輝昭「原始・古代の向原」「向原町誌」上巻 向原町誌編さん委員会 1992年
- (7) 広島県教育委員会「安芸横見廃寺の調査」I～III 1972～1974年
- (8) 広島県立埋蔵文化財センター「明宮地廃寺跡第1～3次発掘調査概報」 1987～1989年
- (9) 向原町教育委員会「地加清1号遺跡」 1995年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「上滝川1号遺跡」 1993年
- (11) 向原町教育委員会「平木遺跡」 1992年

参考文献

- 向原町誌編さん委員会「向原町誌」上巻・下巻 1992年
高田郡史編纂委員会「高田郡史」上巻 1972年



第2図 周辺地形図（1：1,000）（アミ目は調査区、赤太線は道路の範囲）

III 調査の概要

寺之下遺跡は、高田郡向原町のはば中央部に位置し、三篠川の北側の河岸段丘の一つである平沖段丘上に立地する古墳時代から中世にかけての集落跡である。現状は水田であるが、過去に削平を受け、地形は著しく改変されている。本遺跡の標高は200~208mである。

本遺跡の面積は約10,500m²であるが、住環境整備事業に係る4,910m²のうち、道路となる1,110m²を当センターが1997年度に、道路南側の宅地部分を町教委が1996・1997年に発掘調査を行った。

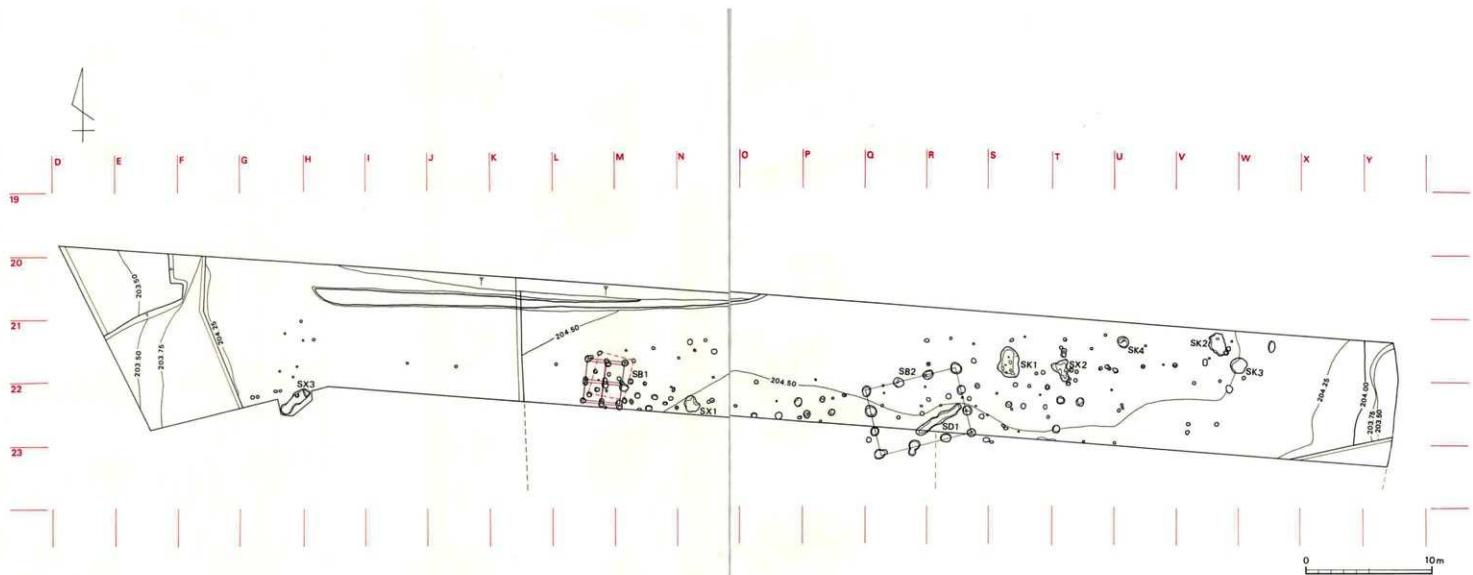
調査区の設定は本遺跡の調査がセンターと町教委に分かれて行われることで、調査区名の共通化を図った。遺跡の北西隅の国土座標値X=-154.290, Y=51.405を基準にX方向に1~31, Y方向にA~Yのラインを5mおきに設定し、遺跡全体が5m四方のグリッドで覆われるようにした。

試掘によって確認された調査区中央部の基本層序は上から耕作土、床土、黒褐色土、黄褐色土である。このうち、黒褐色土は中央部のみみられ、調査区の東側および西側は段丘面に小谷が入り込んでいたと思われ床土の下に河原石が露出していた。

発掘調査は重機で耕作土及び床土を除去したのち、遺構の精査を行った結果、掘立柱建物跡2棟、土壙4基、溝状遺構1条、性格不明の遺構3基、柱穴多数を検出した。遺構は水田の造成時に上面を削平され、残存状態は良くなかった。遺物は耕作土、黒褐色土を中心に須恵器片、土師器片、陶磁器片などが少量出土した。



遺跡見学会



第3図 遺構配置図 (1 : 300)

IV 遺構と遺物

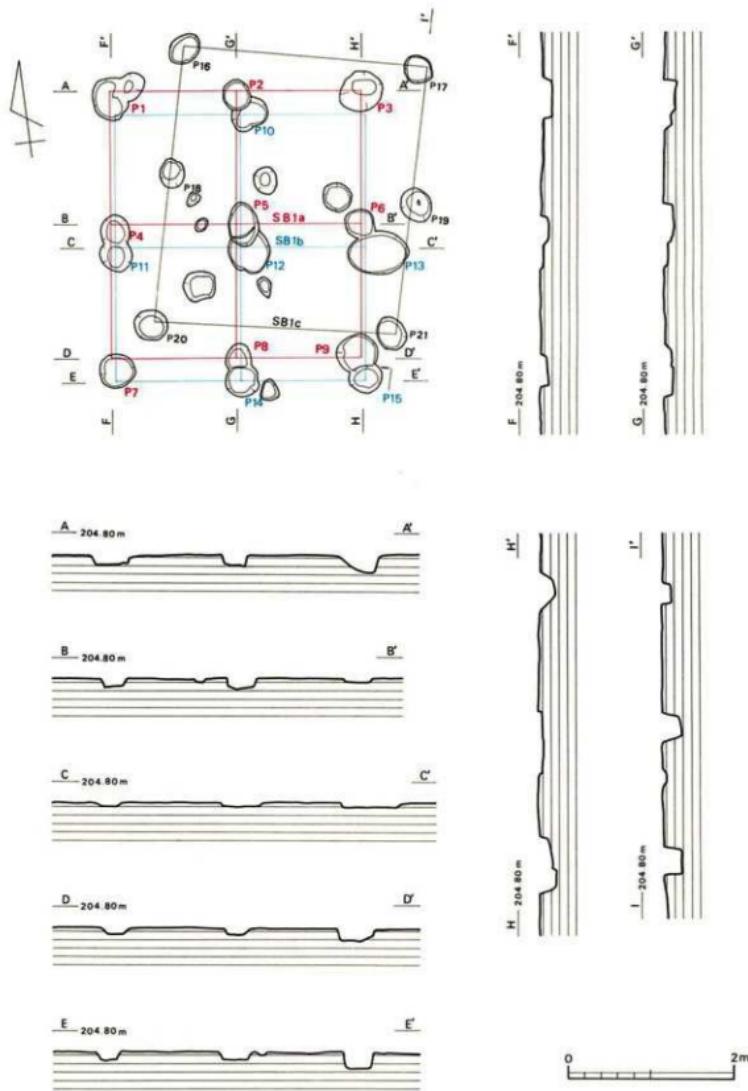
(1) 捜立柱建物跡

SB 1 (第4図、図版3a・b)

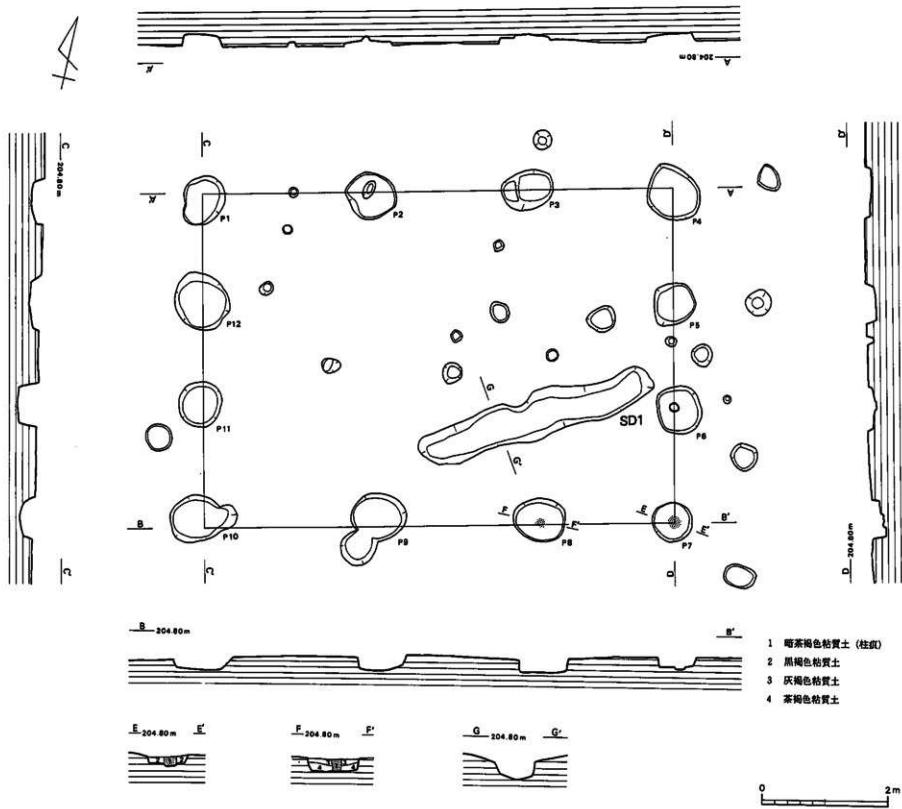
調査区のはば中央、西側南端に位置している総柱構造の建物跡である。柱穴の重複状態および規模などから3期にわたる建て替えが考えられる。SB 1aは桁行2間(3.2m、約11尺)×梁間2間(3m、10尺)である。建物跡の推定床面積は約9.6m²である。桁方向はN 8° Eではば南北方向を指向する。柱間距離は桁行1.6m(約5尺)の等間隔、梁間1.5m(5尺)の等間隔である。柱穴は円形および梢円形で、径が30~54cm、検出面からの深さが4~20cmと削平を受けているためにかなり浅い。SB 1bは桁行2間(3.2m、約11尺)×梁間2間(3m、10尺)で、柱間距離は桁行がP 10-P 12-P 14で1.6mの等間隔、梁間がP 11-P 12-P 13で1.5mの等間隔とSB 1aと同規模である。ほぼ同方向の南寄りに建て替えている。SB 1aの柱穴とはP 2とP 10、P 4とP 11、P 5とP 12、P 6とP 13、P 8とP 14、P 9とP 15が重複している。P 1・3・7は同位置で建て替えたか、削平により消失したものと考えられる。柱穴は円形および梢円形で、径が38~72cm、深さが4~20cmである。SB 1cは桁行2間(3.2~3.3m、約11尺)×梁間1間(2.9m、約10尺)で、桁行の柱間距離はP 16-P 18-P 20が1.5m(5尺)-1.8m(6尺)、P 17-P 19-P 21が1.6m(約5尺)の等間隔である。桁方向はN 14° EとSB 1a・bより7度ほど東に傾いており、柱の重複関係はみられないが、SB 1a・bとほぼ同規模でP 16とP 17、P 18とP 19、P 20とP 21の間に柱穴があったとも考えられることから、SB 1の建て替えであった可能性が高い。柱穴はほぼ円形で、径が28~42cm、深さが7~23cmである。SB 1a・b・cの新旧関係は柱穴底面のレベルが一定でなく、土層による切り合い関係も確認できず不明である。柱穴内の埋土はいずれも黒褐色粘質土で、柱痕は確認できなかった。遺物はP 9・15から土師器の小片、P 17から杯(第9図6・10)、P 19から須恵器の杯蓋(第9図4)が出土している。遺構の時期は古代と考えられる。

SB 2 (第5図、図版4)

調査区の東側中央寄りに位置し、一部は町教委の調査区内にある。規模は桁行3間(7.4m、25尺)×梁間3間(5.3m、18尺)の側柱構造の建物跡である。建物の推定床面積は約39.22m²である。桁方向はN 76° Eを指向する。桁行の柱間距離はP 1-P 2-P 3-P 4が2.6m(約9尺)-2.5m(約8尺5寸)-2.4m(8尺)、P 10-P 9-P 8-P 7が2.75m(約9尺)-2.55m(約8尺5寸)-2.1m(約7尺)、梁間の柱間距離はP 4-P 5-P 6-P 7が1.85m(約6尺)-1.65m(約5尺5寸)-1.8m(6尺)、P 1-P 12-P 11-P 10が1.7m(約6尺)-1.6m(約5尺)-2.0m(約7尺)であるが、桁行・梁間ともに一定でない。柱穴はほぼ円形から梢円形で、径は62~90cm、深さは10~32cmと削平を受けているためにかなり浅く、柱痕を確



第4図 SB1実測図 (1:60)



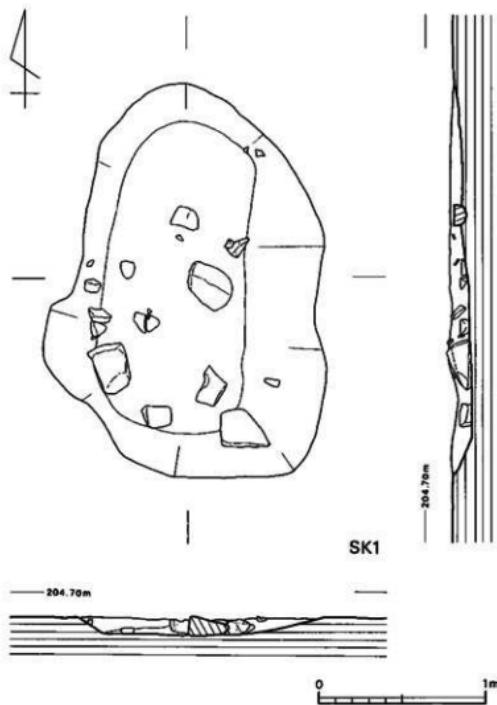
第5図 SB2, SD1実測図 (1:60) (アミ目は柱頭)

認できたのはP 7・8のみである。柱痕の径は16~20cmである。柱穴底面には河原石が多く露出して平坦でないものもあり、レベルも一定でない。柱穴内の埋土は黒褐色粘質土で、一部に茶褐色粘質土、灰褐色粘質土を含むものもある。柱痕は暗茶褐色粘質土である。また、本建物跡の東側に近接して一列に並んだ4個の柱穴が確認されたが、関係は不明である。遺物はP 8から土師器の楕片（第9図2）が1点出土したほか、P 5・7・12から土師器の小片が出土したが、器種は不明である。遺構の時期は柱穴の規模や出土遺物などから古墳時代後期から古代と考えられる。

（2）土壤

SK1（第6図、図版5a）

調査区の東側21-S区に位置する。上面はほぼ橢円形で、規模は長径236cm、短径146cm、深さ12cmである。長軸はほぼ南北方向を指している。上部が削平されて残存状態は良くない。底面は隅丸長方形でほぼ平坦であるが、北側が南側に比べて若干高くなっている。規模は長さ186cm、



第6図 SK1実測図 (1 : 30)

幅85cmである。埋土は柱穴と同質の黒褐色粘質土である。土壤内には9~30cmの石が十数個混入していた。遺物は土師器の小片が数点出土したが、器種は不明である。遺構の時期は不明である。

S K 2 (第7図、図版5 b)

調査区の東北端21-V区に位置する。上面・底面ともに不整な隅丸長方形で、規模は長さ170cm、幅125cm、深さ15cm、底面で長さ155cm、幅112cmである。長軸はほぼ南北方向を指している。上部が削平されて残存状態は良くない。埋土は暗灰褐色粘質土である。底面は凹凸がかなり激しい。また、中央北側に人頭大の石が1個みられるが、底面に食い込んでいる。東南端に近接して径30~45cmの柱穴が2個あるが、本遺構との関係は不明である。南側の柱穴については本遺構より新しいと思われる。遺物は底面全体から土師器の小片が多数出土したが、器形を明らかにできるものはなかった。遺構の時期は不明である。

S K 3 (第7図、図版5 c)

調査区の東端21-V・W区に位置する。ほぼ円形で、規模は径1.2~1.3m、深さ8cmである。削平が激しく底面付近しか残っていない。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。底面には拳大の石が2個と土師器の小片が数点出土したのみである。遺構の時期は不明である。

S K 4 (第7図、図版6 a)

調査区の東側北端21-U区に位置する。ほぼ円形で、規模は径0.8~0.95m、深さ11cmである。削平が著しく底面付近しか残っていない。底面は北側に掘り込みがある。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

(3) 溝状遺構

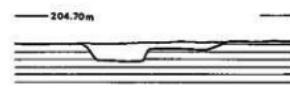
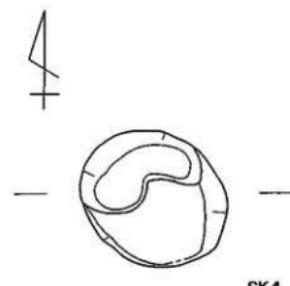
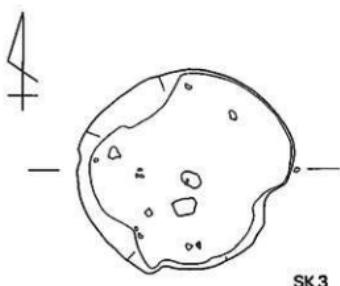
S D 1 (第5図、図版6 b)

調査区東側中央寄りのS B 2 のP 6付近から南西方向に延び、調査区外に続いている。最大幅は約70cm、深さは最深部で26cmである。埋土はほかの遺構と異なり、暗灰褐色粘質土である。遺物は土師器および磁器の小片が出土したが、復元できなかった。この遺構は水田に伴うもので、近世以降のものと考えられる。

(4) 性格不明の遺構

S X 1 (第8図、図版6 c)

調査区の中央、22-N区に位置した不整形の遺構である。規模は南北1.27m、東西1.24m、深さ20cmである。削平によって底面付近しか残っていないが、底面の平面形からみて上面は円形であった可能性がある。底面は南側および東側が少し高くなっている、凹凸も激しい。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。



第7図 SK 2～4 実測図 (1:30)

S X 2 (第8図、図版7 a)

調査区の東側、21-T区に位置した不整形の遺構である。規模は南北1.74m、東西1.38m、深さ16cmで、底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

S X 3 (第8図、図版7 b)

調査区の西南端、22-G・H区に位置した足形状の不整形な遺構である。規模は長さ2.74m、幅0.9m、深さ13cmである。底面は北東端が窪みで深くなっている、中央北東寄りに径28cm、深さ6cmと径30cm、深さ34cmの2個の柱穴がある。底面には河原石が多くみられる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

(5) 出土遺物 (第9図、図版7 c・8)

遺構に伴うものは少なく、SB2のP8から土師器の椀2、SB1cのP17から須恵器の杯6・10、P19から須恵器の杯蓋4、21-T区の柱穴から須恵器の杯8、22-T区の柱穴から土師器の杯1が出土した。完形品は皆無で、水田を造成した時などに消失、破損してしまったものも多いと思われる。以下、土師器、須恵器を中心にその概要を述べる。

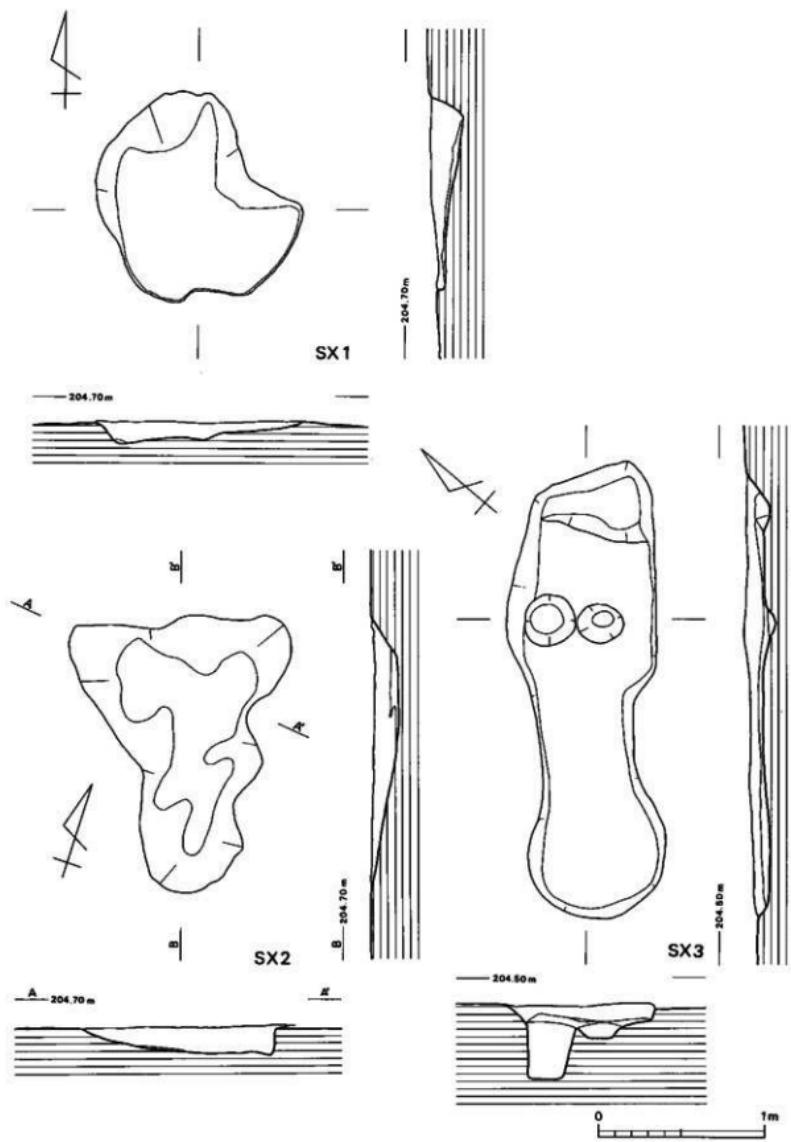
1 土師器 (1・2)

杯 (1) 口縁部から底部まで残存しており、復元口径13.6cm、器高4.0cm、底径8.2cmである。底部は平坦で、体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。調整は口縁部は横ナデで、体部・底部内面はナデ、底部外面は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は暗茶褐色、淡黄褐色である。

椀 (2) 口縁部、体部が残存するのみで、復元口径12.0cmである。体部は内湾気味で、口縁端部は丸くおさめる。調整は不明である。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成はやや不良、色調は暗茶褐色、淡黄褐色である。

2 須恵器 (3~11)

杯蓋 (3~5) 口縁部にかえりをもつもの (4) とかえりのないもの (3・5) に分類できる。3は口縁部が残存するのみで、復元口径16.0cmである。口縁端部は下方に短く屈曲して丸くおさめる。調整は内外面ともに回転ナデである。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色である。4は口縁部のごく一部が残存するのみで、口径などは不明である。口縁端部は丸くおさめて、断面三角形のきわめて短いかえりをもつ。調整は内外面ともに回転ナデである。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は灰白色である。調査区東側21-W区の検出面から出土した。5も口縁部のごく一部が残存するのみで、口径などは不明である。口縁端部は下方へやや外開き気味に強めに短く屈曲して尖る。調整は内外面ともに回転ナデである。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色、灰色である。調査区東側22-S区の検出面から出土した。

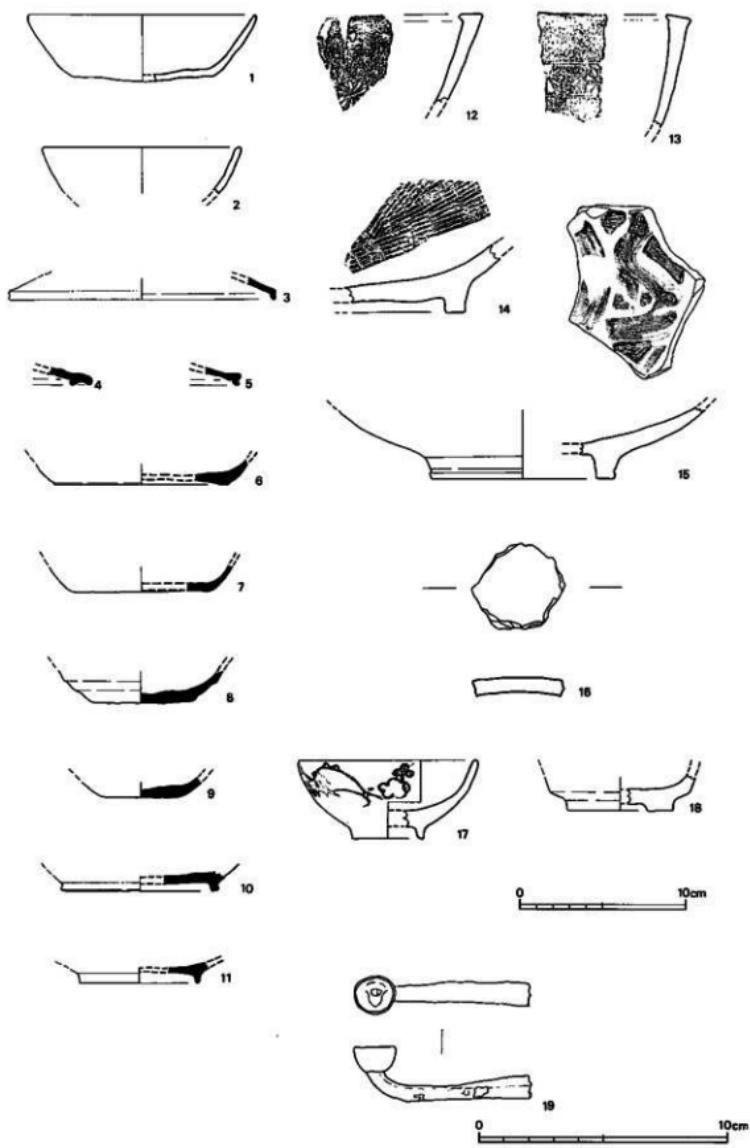


第8図 SX1～3 実測図 (1 : 30)

杯（6～11） 高台のないもの（6～9）と高台の付くもの（10・11）に分類できる。いずれも底部および体部の一部が残存するのみである。6は復元底径が10.4cmである。底部はほぼ平坦で、体部との境にヘラ切り痕が残る。調整は体部・底部内面が回転ナデ、底部外面が回転ヘラ切り後未調整である。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色である。7は復元底径が8.6cmである。底部は平坦で、体部との境は緩やかな丸みをもつ。調整は体部・底部内面が回転ナデ、底部外面が回転ヘラ切り後未調整である。胎土は1mmの砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色である。調査区内の埋土から出土した。8は底部と体部の一部が残存している。底径が6.1cmである。底部はほぼ平坦である。体部は内湾気味に立ち上がる。調整は体部・底部内面は回転ナデで、底部外面は回転ヘラ切り後未調整である。胎土は1mmの砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色である。9は復元底径が5.0cmである。底部は平坦で、体部との境は緩やかな丸みをもつ。調整は体部・底部内面が回転ナデ、底部外面が回転ヘラ切り後未調整である。胎土は1～2mmの砂粒で、焼成は良好、色調は淡灰色、灰色である。調査区東側22-S区の検出面から出土した。10は復元高台径が9.4cmである。底部は平坦で、やや「ハ」字形に開いた断面方形の高台が付いている。調整は底部内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ切り後ナデを施し、高台を貼り付けている。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色である。11は復元高台径が7.2cmである。底部は平坦で垂下する断面三角形の高台が付いている。調整は底部内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ切り後ナデを施し、高台を貼り付けている。胎土は1mm以下の細粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色である。調査区西側21-G区の検出面から出土した。

3 その他の遺物（12～19）

いずれも耕作土から出土した近世以降の遺物である。12・13はともに火鉢である。12は土師質土器で、13は瓦質土器である。ともに体部外面にはスタンプによる菊花文が施されている。14は陶器の擂鉢である。体底部内面に深い擣り目が残る。15は肥前系陶器の皿で復元高台径は11.0cmである。内面にハケ目の文様がある。16は円板状土製品で、陶器の壺片を打ち欠いたものである。径が約5.6cm、厚さ0.9cmである。17は肥前系磁器の碗で、復元口径10.6cm、器高4.7cm、復元高台径4.2cmである。外面に草花文（染付）がみられる。18は肥前系青磁の番炉の底部で、復元高台径は6.3cmである。19は煙管で現存長7.1cmである。



第9図 出土遺物実測図 (1 : 3, 19は1 : 2)

V まとめ

今回の発掘調査の結果、掘立柱建物跡 2 棟、土壙 4 基、溝状造構 1 条、性格不明の造構 3 基、柱穴多数を検出した。遺物は、土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。調査範囲は遺跡全体のごく一部で、全容は明らかでないが、ここでは、掘立柱建物跡を中心に若干の検討を加えてまとめとしたい。

SB 1 は 2 間 × 2 間 ($3.2\text{m} \times 3.0\text{m}$) の総柱構造の建物跡で、上部構造は高床倉庫であると考えられる。本造構は柱穴の重複関係から 2 回にわたって建て替えられている。本調査に引き続いだ実施された町教委の発掘調査で、SB 1 の南側に 3 間 × 3 間 ($7.3\text{m} \times 4.3\text{m}$)、4 間 × 1 間 ($7.8\text{m} \times 4.8\text{m}$) の側柱構造の掘立柱建物跡が 2 棟、2 間 × 2 間 ($3.7\text{m} \times 3.3\text{m}$) の総柱建物跡が 1 棟確認された。¹⁰ これらは SB 1 と桁方向が一致、もしくは直交しており、同時期のものと考えられる。

SB 2 は 3 間 × 3 間 ($7.4\text{m} \times 5.3\text{m}$) の側柱構造の建物跡で、上部構造は主屋に付属的な平地式住居または倉庫などが考えられる。瓦はまったく出土せず、板葺もしくは葦葺であったと推定される。この建物跡の特徴として、柱穴の規模が径 62~90cm とかなり大きく、県内でも最大級である。

SB 1 や SB 2 の存続した時期であるが、ごく限られた出土遺物から推定するのは困難であり、時期を明確にすることはできないが、そのなかでも杯蓋 3~5 は口縁部に、杯 10・11 は高台に特徴がみられ、7 世紀後半から 9 世紀初頭までにおさまるものと思われる。町教委の調査区からもほぼ同時期の須恵器が出土していることから、SB 1・2 は 7 世紀後半から 8 世紀を中心として存続したものと考えられる。

SB 1 と SB 2 は桁方向が異なり、同時期に存在したと考えるのは難しい。その新旧関係を明確にすることはできないが、次の理由から SB 2 は SB 1 に先行すると思われる。SB 2 は桁方向が真北から大きく振れているのに対し、SB 1 はほぼ真北を指している。また、本遺跡は舌状になった段丘上に立地しており、SB 2 が段丘の縁辺部寄りに位置していたと思われるが、SB 1 は段丘上の中央部寄りに位置している。したがって、時代が進むにつれて段丘上の中央部に建物の中心を移していく、桁方向も真北を指すように変わっていったと思われる。

SB 1 は 2 回建て替えが行われている。土層や出土遺物などからその新旧関係を明確にすることはできないが、SB 1 a・b は、桁方向 ($N 8^\circ E$) も同一であることから、相前後して建て替えられたと思われる。SB 1 c の P17・19 から須恵器の杯が 2 点出土しているが、杯 10 は高台の特徴から 8 世紀後半から 9 世紀初頭のものと比定される。おそらく、SB 1 は奈良時代から平安時代初期頃まで存続したものと思われる。

本遺跡の掘立柱建物跡は SB 1・2 を含めて数棟確認されたが、SB 1 と SB 2 と時期差があり

られることから、建物群は少なくとも 2 群存在したものと考えられる。SB 1 を含む群は本調査区の北側または町教委の調査区の西側、SB 2 を含む群は西側に近接して大きな柱穴が 4 個みられ、これらの柱穴を結んだ線と SB 2 の軒方向がほぼ平行になることから、ここにも、SB 2 と同時期の建物が存在したと考えられる。また、本調査区の北側に主屋が存在し、さらに大きな建物群を形成していたことが想定される。

本遺跡の歴史的位置づけについてであるが、本遺跡では SB 2 のように大型の柱穴をもつ掘立柱建物跡が確認されている。古代において柱穴の規模がこれほど大きいものは官衙関連施設、寺院および有力豪族の居館などであり、県内では、備後国府跡推定地⁽¹⁾、三次郡衙跡と推定される下本谷遺跡⁽²⁾、古墳時代後期の豪族の居館跡と考えられている大宮遺跡など数例が確認されている。したがって、本遺跡もそれらいずれかの施設であると推定される。建物の配置や出土遺物などから郡衙のような官衙関連施設や寺院を考えるのは困難であるが、有力豪族の居館跡である可能性は高い。数少ない遺物から遺跡の時期を確定できないので推測の域を出ないが、本遺跡の南東約 1 km に 7 世紀後半から 8 世紀前半の古代寺院と推定される正敷田遺跡⁽³⁾がみつかっており、寺院を建立した豪族の居館跡である可能性も十分考えられる。また、SB 1 の南側に 6 間 × 4 間 (9.75 m × 16.2 m) の三面庇をもつ古代から中世にかけての巨大な掘立柱建物跡がみつかっているが、この建物跡は県内でも例のない規模である。本遺跡が古代から中世にかけて断続的に存在し、有力豪族の本拠地であったと考えができるが、どのような役割を果たしたかは不明な点も多い。今後の発掘調査によって解明されることを期待したい。

註

- (1) 向原町教育委員会「寺之下遺跡説明会資料」 1997年
- (2) 広島県教育委員会「備後国府跡—推定地にかかる第 1 次調査概報—」 1983年
広島県立埋蔵文化財センター「備後国府跡—推定地にかかる第 2 ~ 7 次調査概報—」 1984~1989年
広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「備後国府跡—推定地にかかる第 8 次調査概報—」 1990年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「備後国府跡—推定地にかかる第 9 ~ 10 次調査概報—」 1991~1992年
- (3) 下本谷遺跡発掘調査団「下本谷遺跡—推定備後國三次郡衙跡の発掘調査報告—」 1975年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第 1 ~ 4 次発掘調査概報」 1980~1983年
広島県立埋蔵文化財センター「下本谷遺跡第 5 ~ 6 次発掘調査概報」 1984~1985年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大宮遺跡発掘調査報告書 兼代地区」 I・II 1985~1986年
- (5) 小都隆・松井輝昭「原始・古代の向原」「向原町誌」上巻 向原町誌編さん委員会 1992年
- (6) (1) と同じ

参考文献

- 向原町誌編さん委員会「向原町誌」上巻 1992年
高田郡史編纂委員会「高田郡史」上巻 1972年



a 遠景（北東から）



b 調査前近景（東から）



c 調査後全景（東から）



a 調査後遠景（西から）



b 調査区東部（南西から）



c 調査区西部（南東から）



a SB 1 (南から)



b SB 1 (東から)



c 作業風景



a SB 2 (南から)



b SB 2 (西から)



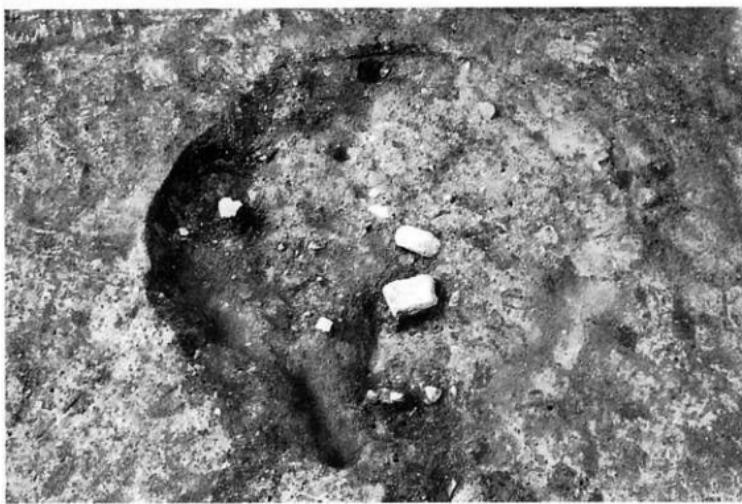
c SB 2 P 8 柱痕
(南から)



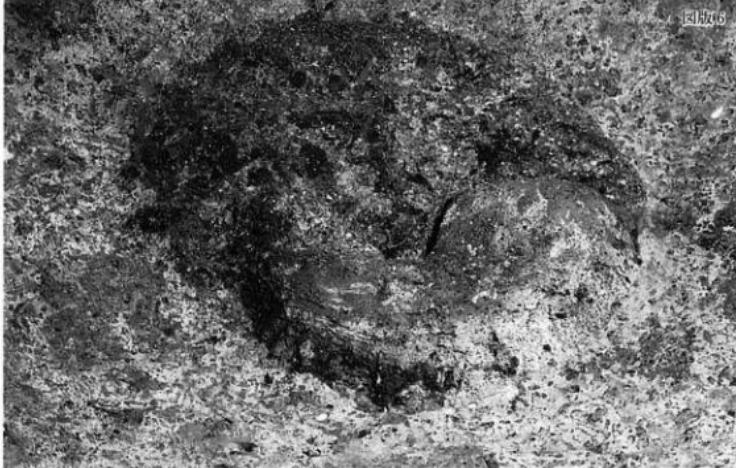
a SK 1 (南から)



b SK 2 (東から)



c SK 3 (南から)



a SK 4 (南から)



b SD 1 (北西から)



c SX 1 (南から)



a SX 2 (東から)



b SX 3 (南東から)



c 22-T区柱穴遺物
出土状況 (南から)



出土遗物

報告書抄録

ふりがな	てらのしたいせき							
書名	寺之下遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第171集							
編著者名	中村尚							
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目 8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東緯 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
寺之下遺跡	広島県高田 郡向原町大字坂字寺之下1217他	34386	104	34度 36分 25秒	132度 43分 42秒	19970519 19970801	1,110	農村活性化住環境整備事業 (向原地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
寺之下遺跡	集落	古墳時代後期 奈良時代 平安時代	掘立柱建物跡 土壙 溝状遺構 性格不明の遺構	2棟 4基 1条 3基	須恵器 土師器 陶磁器	径が62~90cmの大きな柱穴をもつ掘立柱建物跡を1棟確認		

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第171集

寺之下遺跡

発行日 1998(平成10)年3月31日

編集・発行 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL(082)295-5751

印刷所 (株)エル・コーポレーション